

---

# 世界をしらない少女

まり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界を知らない少女

### 【コード】

N9060X

### 【作者名】

まり

### 【あらすじ】

狭山 辰徳（35）の前に突然現れたのは、髪をバサバサとなびかせ、ボロボロの服を着て痩せこけた女。

彼女は中学生の頃に亡くなった初恋の人だった。

死んだと思っていた人が突然現れたことに戸惑う辰徳…

彼女は中学生の頃に、義理の父に暴行につけ子供ができていたと告白  
死を選び、山にいくが死にきれず子供を山の中で出産、山で子供を  
育てたと言う。

そして彼女は辰徳にお願いをする

もう自分の命は短い、どうか子供を助けてほしいと。

山の中で育てられた少女、彼女は山の中だけがすべての世界…

戸惑う辰徳だが、少女を救いにむかう決心をする。

この世界を知らない少女と向き合う辰徳だが…

## たつのとよぶ女

「ああ…もうこんな時間か…」

そうつぶやきながら、僕は窓に目を向けた。

「真っ暗だな…」

時計は午後9時をまわっていた。

「また、おそくなったな、今日はここまで…」

僕はあわただしく机を片付け始める、いつものように大きなため息をついたあと、部屋に鍵をかけ足早に階段をかけ降りる。

「あー、肩いてー」

僕の声が階段に響き渡る、毎度毎度のことだが何で僕ばかり残業なんたよ！

そう心でつぶやきながら両肩をぐるぐるとまわしだす。

もう誰もいない会社、何となく薄気味悪い…

「しかし何でこのビルは、エレベーターついてないのかな！」

僕の働く事務所は、ビルの五階にある、毎日の登りおりは疲れた体に大ダメージだ…。

長い階段をおりていくと、もう誰もこのっっていない会社で一人だけ僕を待っているやつがいる、そいつは一階の窓口にある大きな一枚の鏡とその中に写る僕だ。

「今日も1日お疲れ様、また明日」

そう、鏡の中の自分に挨拶をして帰るのが僕の日課だ…。

僕の会社から自宅までは、車で30分程度の距離だが…。

こつも街灯もない山道をはしっていると、同じ道を永遠にまわり続けていたのではないかという錯覚におちいる。

本当、田舎だよ。

しばらく走り続けると、ポツンポツンと光が目飛び込んでくる、寂しいながらもキラキラと輝く町のあかりだ。

「ただいま……」

そう光につぶやくのも、いつの間にか日課になっていた。

光が見えてほどなく、僕の自宅も見えてくる。

今日も1日頑張ったよ本当に、僕は疲れた手つきで車を車庫にまわした。

そして、いつものように、バックで車庫に入ろうとした時。

「ん……？なんだ……」

ミラー越しに、僕の目に飛び込んできたのは、車庫のすみに小さく丸まった黒い物体だった…。

「なんだあれ？」

薄暗い車庫の中では、ミラー越しにそれが何なのか確認する事はできない。

僕は仕方なく車をおりて、黒い物体の確認にむかった。

コッソ、コッソ…

静まり返った車庫の中に僕の足音が響き渡る…

コッソ…コッソ

ガサ…！

「えっ！？っわぁー！」

突然動き出した黒い物体に僕は思わず大声をあげる！

「きゃあ  
」

僕の声に驚いたように、黒い物体が声をあげた。

え…？女性の声…？

人なのか？

「だ、誰だ？」

僕の声に反応するかのようには、黒い物体は立ち上がり、その姿はようやく人だと認識できひとまずほっとする。

しかし、こんな時間に人の家の車庫にもぐりこんでいたやつだ、僕は自然と拳に力が入った。

しばらく二人の動きがとまる…

「た…たつ…のん？」

先に声をあげたのは相手だったが

え……！い、いま何て…

得たいの知れない人影から聞こえてきた声に、背筋が凍った…。

たつのん…それは、僕がまだ中学生の頃に呼ばれていたあだ名。

聞きなれたあだ名…

しかし、そう呼んでいた人物はただ1人だけ…

いつも

笑顔で

飛び付いてきた

あいつ…

僕の…

初恋の…人

「たつのん…」

再び聞こえる声。

「や、やめる！だ、誰だ！」

体から血の気がひいていく

聞き覚えのある声…

冷や汗が体を流れ落ちる…

心臓が今にも爆発しそうな勢いで鼓動を打つ

だって

だって…あいつは、あいつは、中学生の時に死んだんだ！



かなえ

僕は、ゆっくりと後退りする…

それに、合わせるかのようにこちらにむかってくる人影！

恐怖で目がらそらせない…

やがて、僕の体は外の街灯に照らし出される。

そして…彼女も…。

「あ、あああ」

次の瞬間、僕の目に飛び込んできたのは、髪をバサバサになびかせ、ボロボロの服に身を包まれ全身痩せこけた女性だった。

「たつのん…」

僕の名を呼び続ける女性：

その姿は、まるでお化けのようだ！

「ふざけるな、お前誰だよ」

必死に声をふりしぼりながら、彼女を睨み付ける！

「わ、わた、私は……」

かすれた、とてもか細い声……

「私は、か、かなえ……です」

そう言った瞬間、彼女は泣き崩れていく。

必死でこちらをみながら、口を動かしている、きつと声にならないのだろっ……。。

かなえ…。

間違いない…彼女の名だ、中学生の頃に亡くなった彼女と同じ名前、  
そして、かすれてはいるが懐かしい声…。

一体どうなっているんだ、目の前の彼女は幽霊なのか…。

さくらんぼ

ゴクリと大きく息をのむ…

「う、う…うわぁ、う」

目の前で、かなえを名のる女性の姿に戸惑いを隠せない。

そんな僕の前で必死に涙をぬぐう彼女…

「か、かなえは…し、死んだんだ！君は一体何者なんだ！」

僕の言葉に反応するかのように、顔をあげ僕を見つめる。

「し、死んだんだ…やっぱり、死んだんだ…」

「…な、何を言ってるんだ！」

彼女が、ゆっくりと近くに歩みよってくる。

僕はその歩みと一緒に、一步一步後退りをしてしまつ。

「死んだん事になつてて、当たり前だよね……」

「えっ？」

「たつのんは、かわらないね……」

「……………」

何を急に……。

言葉がでてこない。

「さくらんぼ、よく一緒にとって食べたよね

」

「!?!」

僕はその言葉を聞いてハツとしてしまう。

確信するしかなかった…。  
間違いない、かなえだ…。

僕の家の庭には、さくらんぼの気が植られていて、昔よくかなえと一緒に木に登ってたべていた…。

彼女との一番の思い出だ。

「う、嘘だろ…かなえ…お前、幽霊なのか？」

「そう、なりたかった…かな」

「何を言ってるんだ!?!」

頭の整理なんかできるはずがない、今この瞬間の現状だって受け入れることも、理解することもできない!

落ち着く事だつてできないが、今僕の目の前には、かなえらしき人が立っている。

「と、とにかく…中に入らないか？」

僕は何を言ってるんだ！

「いいの？」

でも、このまま逃げるわけにもいかない。

僕はコクリとつなずく。

「わたし、幽霊かもよ…」

「そ、それを今から確かめるんだ！」

僕の言葉に彼女は、涙をためた目で少しだけ微笑んだ。



裏口

肩こしに彼女の視線を感じながらゆっくりと足を進めていく。

何がどうなっているのか。

僕は震える手を必死でかくしながら、玄関を開けた。

「あの…」

ビクッ!!

彼女の声に思わず飛び上がる。

「な、なにか？」

「あの、こんな格好なんですけど、おじやましていいんですか？」

彼女の声がいちだと小さく、大きく顔をそらしている。

「……。」

先程とは違い、玄関からもれる光でハッキリと彼女の姿が見えてくる。

こゝ、これは……

肌は驚くほど汚れて黒く、髪は地面までつたいボサボサと広がり顔をおおっている。

服は…ボロボロすぎて、服のかたちをなしていなかった…。

本当に、かなえなのか？

もし、そうだとしたら…彼女に一体何が？



そう言うと彼女は頭を大きくさげて、スタスタと歩き、僕の横を通り過ぎていく。

彼女は迷うことなく、家の裏口に向かっていくのがわかった。

僕はあらためて思った！

本当にか、かなえ…なのか。

彼女は、迷うことなく裏口にあるお風呂場に向かっているんだ。

かなえとは、子供の頃からよく遊んでいて、悪いことをして汚した服を親に内緒で、よく裏口にまわりお風呂で洗っていた。

かなえ…。

僕はバタバタと部屋にあがり、裏口の鍵を開けた。

「ありがとう」

「いや、本当に、かなえなんだな」

彼女はコクリと頭を下げ、鼻をすすっている。

「服、僕のおいとかから」

「ありがとう」

そして、僕は自分の部屋へむかった。

涙

遠くから、シャワーの音が聞こえる…

「かなえ…」

まだ、僕の心は半信半疑だが…

「ふう…」

僕は、服を手に取りお風呂場へ向かった。

「きゃー、あつっ！熱、あつっうーあちー！！！！」

お風呂場から叫び声ともとれるような声が聞こえる！

「えっ？ちよっ！か、かなえ？大丈夫か？」

慌てて声をかける！

すると

僕の声と同時にシャワーの音がとまった！

カチャ…

えっ？

「ごめんなさい、うるさかった？温かいお湯浴びるの久しぶりすぎて」

彼女は、ドアを少しだけ開けそこから顔をのぞかせ、苦笑いしていた。

「か、かなえ、かなえ、かなえ！」

「たつのん？」

僕は、その場に泣き崩れてしまった…。

シャワーを浴びてキレイになった彼女の顔は、痩せこけてはいるものの、間違いなく彼女の顔だった。

「たつのん？大丈夫…」

ハッ？

「着替え、おいとく、僕のだけどつかって」

そう言うと、僕は顔をあげないまま逃げるようにこの場を離れた。

落ち着け、落ち着くんだ！

かなえは、生きていたんだ！死んでなんかなかったんだ！

口から心臓が飛び出してきそうなくらい緊張していた、いろんな気持ちがまざりあってパニックになりそうだ！

僕はふらふらになりながらリビングに座り込んだ。



ま、マジか！時間がすぎたことさえわからなかった。

目の前に立っている彼女は、先程までとはまるで別人で、髪はタオルでくるみ肌も白くなっていた。

「シャワー…ありがとう」

「い、いや、えっと…適当に座って」

彼女を見ているとまた涙があふれだしてくる。

「飲み物入れてくるよ」

また僕は、逃げるようにその場をさった。

僕は、必死で涙をぬぐいながら台所へむかう、落ち着くんだ！落ち着け！

「そつだ、お茶だ、お茶をいれよう！  
お茶〜！お茶〜！」

「お茶、お茶おちゃちゃー！おちゃ〜」

「た、たつのん？」

「わあ茶ちゃちゃちゃちゃ」

「きちゃちゃちゃ！」

ハッ？！

しまった！ビックリしてまた思わず叫んでしまった！

「いじいじ、いめん」

「ハハハハ、ハハハハ」

きよとんとしていた彼女の顔が笑った…。

「ハハハハ」

そして、僕も一緒に笑った彼女と一緒に笑うのは何年ぶりだろう。

そして、僕らは二人でしばらくの間泣き崩れながら笑いあった。

生きていた

「かなえ、とりあえず座って、聞きたいことだらけだよ」

「うん」

僕はリビングの椅子に腰かけた。

「かなえ、今までどこにいたんだ？」

「……………山。」

「山？」

「そう、山」

山って…。何を言ってるんだ！

「あのね、あの…」

かなえは、口を動かしながら下をむいた。

「かなえ、ゆっくりでいいから」

かなえは、小さく頭を上下している。

しばらくの沈黙のあと、かなえの鼻をすする音だけが部屋に響びいていた。

よほどつらい思いをしていたのだろう…。

「あのね、何かから話したらいいのかな…」

少し頭をあげては話そうとせするが、また下をむく。

そんなしぐさを何度も繰り返す  
そして、かなえはまた黙りこむ

僕はかなえが話してくれるのをじっとまった。

もう何年前になるのだろう、僕が15才の頃だ、かなえとは家も近くて子供の頃からずっと一緒に遊んでいた。

毎朝同じ時間に待ち合わせをして、一緒に学校に通っていた。

その日もいつものように彼女がくるのを待っていたんだ、しかし何時になっても彼女は来なかった。

その日からずっと…。

僕は毎日彼女を探した、僕だけじゃない僕のまわりの人達も、警察も彼女の両親も…。

でも彼女が見つかることはなかった…。

それからしばらくして、警察と両親がかなえの部屋で「死にます」と書かれたノートを見つけてしまう。

見つからない彼女、まわりの人々は彼女の死をうけいれた。

そして、僕も…。

「あのね…」

「えっ！」

あっ…いけない頭の中が整理できなくて、つい考えごとで頭がいっぱいになってしまっ。

「じゃめんな、どうした？」

それから、かなえはゆっくりと話しはじめる…

## 父親

「私ね、死のうと思ったの…。」

「うん」

彼女の腕にどんとどんと力が入るのがわかる、こきざみに震えながら、力一杯拳をにぎっている。

「かなえ、大丈夫か！」

僕はとつさに彼女の手を握った！

なんて細い手をしているんだ、それにとっても冷たい…。

「あつたかい」

「えっ？」

「ありがとう」

そう言っただけで彼女はにこりと笑った。

ああ、この顔だ僕の大好きな笑顔だ。

「私ね、あいつに…あいつ、に」

「うん、あの…かなえあいつって？」

ギョツ！

かなえが僕の手を強くにぎりかえしてくる。

「お、お父さん…」

「えっ？おじさん？」

かなえが大きく頭を下げた。

「あいつは、本当の父親じゃない…から」

「うん」

かなえの本当のお父さんは、かなえが生まれてすぐに亡くなったらしく、今の父親は僕らがまだ小さな頃にやってきた。

「おじさんがどうかした？」

「私は!？」

かなえの声が突然叫び声にかわる!

「私は、あいつにおそわれたの!」

……。

えっ?

今、なんて…。

「私は、お母さんのいない間におそわれたの！」

嘘だ…ろ。

「あいつに！」

嘘だ！

だって、おじさんはかなえがなくなった時に本当に心配して、必死でかなえを…。

「それだけじゃない、私はあいつの子供を…」

「子供を…？」

まさか、おじさんの子供…。

「うわあああああ」

かなえが大きな声で泣き崩れ、僕は彼女の体を強く抱きしめた！

「かなえ、かなえ…」

なんてことだ、なんてことなんだ！

ちくしょう！！

かなえは一体どんな体験をしてしまったんだ！

「うわあああああ、うわあああああ」

「かなえ、大丈夫だから、かなえ…」



## のぞみ

「ひっく、ひっく」

「かなえ…大丈夫？」

「お母さんには、言えなかったの」

おばさん、かなえは知らないんだおばさんはかなえがいなくなったあと病気で亡くなってしまったんだ。

今は、この話はやめておこう。

「子供がお腹にいることがわかって、私は山に行ったの、死のうつて…思った…。」

怒りと切なさが込み上げてくる、僕は何も知らずに…あんなにいつも一緒にいたのに。

僕は…。

「死ねなかった…死ねなかったの」

かなえは、涙をぬぐいながらゆっくりゆっくり話をしてくれる。

しかし、僕はなんと声をかけていいのか正直わからなかった。

「私ね、きつともう長くないと思う」

「えっ？」

突然のかなえの言葉に驚いてしまう。

「たつのん…私ね子供産んだの」

「ええ！」

「今も私を山でまってる、あの子は山から出たことが一度もないの」

かなえが僕の両腕を強くにぎりしめながら、僕の顔を必死にのぞきこみ強く言った。

「お願い、あの子を助けて」

「ちょっと、かなえ落ち着いて、山でって、いったい何処なんだ？それに長くないってどういう意味だよ」

あれ？

「かなえ？」

かなえの体がどんどんと倒れていく！

「かなえ！かなえ、かなえー！」

「たつのん、お願い…あの子を助けて」

かなえの目がつつろになっていくのがわかる。

「かなえ、しっかりしろ」

「名前は、のぞ…み、場所は…」

声までもどんどん小さくなっていく！

嘘だろさっきまで普通に話してたじゃないか！

「かなえ、まってる今救急車呼ぶから」

立ち上がるつとめる僕の腕をつかんでくる彼女！！

「場所は…」

「かなえ…わかった、場所どこ？」

小さくなる声に僕は必死で耳をかたむけた。

「必ず助けに行くから、だからかなえ病院にいこう！」

突然どすつと彼女の重みが体にのしかかる！

「かなえ？かなえ！」

だらりと力がぬけている手を握りしめる！

僕はあわてて救急車をよんだ。

## 病気

静かに時がながれる…。

かなえ…。

僕とかなえは、近くの病院にいた。

「辰徳」

声の方に顔をむけると、僕達の同級生でもある山本が立っていた。

「辰徳、彼女は一体誰なんだ？」

「山本先生、あいつ助かるよな」

山本はこの病院の医者で、かなえのこともよく知っている。

「先生はやめろ、それより彼女に見覚えがあるんだが、カルテの名前も……」

「山本……」

「まさかな、幽霊でもつれてきたのか？なんて……」

「かなえだよ……」

二人の間に沈黙がながれる。

「しかし、彼女は亡くなったはずだろ」

「僕も……驚いた。」

山本が頭をぐしゃぐしゃとかきはじめる。

「山本、僕ちよつと行かなくちゃ……」

「おい、ちよつと待てよ」

僕はふらふらな足でゆっくり立ち上がり、山本に深く頭を下げた。

「かなえとの約束なんだ、必ずもどってくるからそれまで彼女をよろしく願います」

「お、おい辰徳」

僕は頭を上げて歩き出す。

かなえ……必ずつれてくるからまってるよ。

「はあ、あいつ大丈夫なのかフラフラじゃないか！しかし、彼女は……」

僕は病院を後に、のぞみちゃんがいる山へむかった。

## 山へ

僕は車を走らせる。

辺りはほんのり明るさをとりもどしてきていた。

頭がもつろつとする、街を離れてどれくらいたつだろう、かなえはこんな遠くから歩いて来たのだろうか？。

かなえが倒れていく中で、必死で僕に伝えようとした場所だが、本当にこんなところであつてるのだろうか。

「確かに…山だな」

これは、何か目印をつくらないと帰ってこれなくなるよな…。

僕は木に印をつけながら山の奥へと進んでいった。

「のぞみちゃん、聞こえるかー」

くそ、草や枯れ木に足をとられる！傷だらけだよ。

「のぞみちゃん」

一体どこにいるんだ？

僕がむしゃらに歩きまわっていく、早く早く見つけなくては！

ガサガサ！ガサガサ！「いてっ！」

簡単なことじゃないのは理解していたが、こんな山の中、下手したら僕が死んでしまうんじゃないか！

弱音をはくな！しっかりしろ！負けてたまるかー！

「はあ、はあ、」

あれ？

気のせいだろうか、あそこだけ草が倒れて道が出来ている！

かなえ…かなえが作った目印だろうか？

まさか、熊か猪のたぐいって可能性も！

考えてても仕方がないな、僕は獣道にそって山をのぼった。

「はあ、はあ、はあ、」

くそ、どこにいるんだ！ だいたい普通に考えて見つかるはずなんかないんだ、こんな広い山の中！

心がおれそうだー！

「はあ、はあ、はあ、水…」

「かなえーのぞみー!!」

意識がもうろうとする!

僕はその場に膝まずいてしまった。

「ま……ま」

えっ?

今のは、人の声じゃ!!

遠くの方からかすかに人の声らしきものが聞こえた気がする!

僕は目を閉じて耳に集中する。

## 声の先

サラサラ、サラサラ

風にゆれる草木の音「ま、ま、ま」やっぱり人の声！

「のぞみちゃん！」

僕は無我夢中で叫んだ！！「のぞみちゃん！」

きつとのかなえの娘に間違えない！

僕は声のする方にむかって走った、草木が激しく顔にぶつかる！

「くそ、邪魔だー！」

「のぞみちゃん！どこだー！」

声が聞こえない！

かなえ以外の人間を知らずに育ったんだ！  
僕の声にビククリしているのかもしれない！

それでも僕は叫び続けた！

「のぞみちゃん」  
えっ？

「うわあああああ！」

突然足元から崩れ落ちる！

嘘だろ！

「うわあああああ！」

何がおこったかわからない！

ただ僕は逆らえることなく山を転げ落ちていく！

「うわあああああ！」

ザザザザザザザ！ザザザザザザザ！

ドス！

「じゅじゅじゅ」

い…た…。

「ムジが…サレ…。」

見つけた

「かはあ…」

あれ？僕は？

いててててて！

体を動かそうとするが、全身に電気がながれるような痛みがはしる。

僕は…。

目を開けているのに、何も見えない！

「漆黒の闇か…」

かなえはこんな真っ暗な中で生きてきたのか…。

かなえ…。

「かなえー！ー！！」

とてつもない恐怖におそわれる！

真つ暗な世界！

聞きなれない闇の音！

怖い！

ガサガサ！

「!!!!!!!!!!」

ひたいから冷や汗が流れ落ち、全身震えが止まらない！

何の音だ！熊……か？鹿か？猿か？

僕の頭は恐怖でいっぱいになり、ただただ怯えることしかできなかった。

たのむ、こないでくれ！こないでくれ！

ガサガサ！

ガサガサ！

「くそ！」

ガサ！

音が頭の上まできて止まったのがわかる。

「くう」

僕は思わず目をグッと閉じた！

「ママの…名前、何で」

えっ？

驚きと共に目をあける！

雲間から月明かりがさしこむ…。

人？女の子！かなえと同じ姿！

僕はあわてて体をおこそうとした！

「ういだだだだだだ」

「きややややや」

ガサガサガサガサ！

しまった、脅かしてしまった！逃げないでくれ！

「のぞみちゃん、のぞみちゃんなんだろう？」

ガサガサ

「なぜ？私の名前…？」

やっぱり。

「よかった！よかったー！！」

ガサガサガサガサ！

「わわっ！ごめん逃げないで」

思わず大声をはりあげてしまい、彼女をおどろかせてしまう。

「ママに、かなえに頼まれたんだ、君を迎えにきたんだ」

「むかえ？むかえてなに？ママは？」

聞こえるか声が震えてるのがわかる！



そう言って僕は、ポケットに手をいれる。

「いててててて、ああ怖がらないで！」

「これみて」

僕がポケットから取り出したのは、かなえが持っていたボロボロのネックレスだった。

彼女がお風呂に忘れてた物だ。

「ママの……！！！！！！」

彼女が僕に飛び付いてきた！

「そっ、ママの……ママの……」

僕はにこりと笑った。

「ママ、ママ、ママ」

「うん、行くうね」

そう言って頭をなでる。

やっとみつけたよ、かなえ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9060x/>

---

世界をしらない少女

2011年11月3日02時08分発行